

女流義太夫普及公演

ぎだゆう座

八月公演 生写朝顔話

二〇二二年 八月一日(日)・二日(月)

しょううつしあさがおばなし

生写朝顔話

一日

解説 鶴澤弥々

明石浦船別れの段

浄瑠璃 竹本 駒佳

三味線 鶴澤 津賀榮

薬売りの段

浄瑠璃 竹本 寿々女

三味線 鶴澤 賀寿

宿屋の段

浄瑠璃 竹本 越孝

三味線 鶴澤 津賀花

二日

解説 竹本越里

宿屋の段

浄瑠璃 竹本 越孝

三味線 鶴澤 津賀花

大井川の段

浄瑠璃 竹本 綾一

三味線 鶴澤 弥々

偶数月の

一日・二日は

ぎだゆう座



☆裏面もご覧ください

ところ お江戸上野広小路亭 TEL03-3833-1789

山手線御徒町駅下車徒歩3分 地下鉄銀座線上野広小路駅 A4 出口すぐ

開演 午後6時20分(開場6時) (開演・開場時間が通常より早まっておりますのでお気をつけください)

入場料 前売り1500円 子ども500円 (当日券はございません)

【完全予約制】定員になり次第終了

お申し込み (Email) jyogi.gidayuza@gmail.com

お問い合わせ 一般社団法人 義太夫協会

TEL03-6265-1880(月~金 10~17時) http://www.gidayu.or.jp



生写朝顔話

《この前のあらすじ》 深雪は宇治川の蜚狩りで出逢った宮城阿曾次郎という侍に

一目惚れをしますが、阿曾次郎は急用で帰国をしなければならず、扇に『露のひぬ間
の…』という朝顔の歌を書き、深雪に渡して別れます。

明石浦船別れの段

秋月弓之助は妻と娘の深雪を連れて国元・

芸州(今の広島県西部)に、帰国の途中です。船は明石の浦で風待ちのため
停泊中、深雪は琴を弾きながら、朝顔の歌を唄っています。そこに偶然小
舟を出していた阿曾次郎。二人は再会を喜びあい、深雪は阿曾次郎の舟に
乗移ります。阿曾次郎は一緒にいたいと思いつつ、深雪を連れて行く決心
をし、深雪は書置きを残すために一旦自分の船に戻ります。すると急に
風が出て、深雪の乗った船は碇を上げて動き始めてしまい二人は別れ別れ
になるのです。

薬売りの段

浜松城下の小松原、不動尊の御縁日で薬屋が『笑い

薬』を売っています。島田の宿・戎屋の主人徳右衛門が島田へ帰る道すが
ら、薬屋から『笑い薬』を買う、チャリ場(滑稽な場面)です。

《この間のあらすじ》 秋月弓之助は深雪に駒沢次郎左衛門との縁談を薦めます。

宮城阿曾次郎が改名して駒沢になつているとは全く知らない深雪は阿曾次郎を追つて
家を出奔。艱難辛苦の末、盲目になつた深雪。乳母の浅香と再会しますが、悪者から

深雪を守るため浅香は命を落とし、深雪は浅香の父親古部三郎兵衛を探すのです。

宿屋の段

島田の宿屋に泊まっていた駒沢は、深雪と自分しか知ら

ない朝顔の歌を部屋の前に見つけます。宿屋の亭主・徳右衛門に頼み、
朝顔と名乗っている深雪を呼び寄せます。深雪は駒沢の前で琴を弾きなが
ら身の上を語ります。お家乗っ取りを企む悪人一味の岩代と同席している
ために自分だと名乗れない駒沢。盲目の深雪は駒沢の労いの言葉の心に心
を残しますがこの場を後にします。駒沢が深雪にお金や目薬を残して宿
屋を去った後、深雪は彼が尋ねる夫だと気づき、駒沢を追いかけます。

大井川の段

雨の中、深雪は大井川までたどり着きますが、駒沢

は既に対岸に渡ってしまい、今は大雨の増水で川を渡ることができません。
悲しくくれた深雪は川に身を投げようと思いますが、そこに深雪の実家秋
月家の家来・関助と宿屋の徳右衛門が駆け付けます。深雪が乳母浅香の
死後、浅香の父を尋ねていることを話すと、徳右衛門はいきなり自らの腹
に短刀を突き立て、深雪に自分が浅香の父親であることを伝え、甲子の年
の生まれの自分の生き血と秘薬を調合し服用させるとたちまち深雪の両
眼が開きます。深雪は徳右衛門の恩に涙し、駒沢との再会を思うのでし
た。

【 新型コロナウイルス感染拡大防止のためのお願い 】

- * 37.5℃以上の発熱のある方、それ以外でも咳・痰の症状など体調の悪い方は来場をお控えください。チケット代は後日返金させていただきます。
- * 入場時にはマスクの着用、手指の消毒をお願い致します。
- * 客席にはお連れ様同士でも間隔をあけてご着席頂き、会話は控えさせていただきますようお願い申し上げます。
- * 受付等のスタッフはマスク・フェイスシールド・手袋等を着用致しますので、ご理解のほどをお願い申し上げます。
- * 開演中も換気のため扉を開放致しますので、外部の音が聞こえる場合がございます。何卒ご了承ください。
- * 出演者への面会・差し入れはお控えください。